

OBIRAME 25

Newsletter June.2006

オビラメの会ニューズレター25号のおもな記事
特集イトウ復活大会議・野田知佑氏講演から—p2／パネル討論「遡上イトウを迎えるためにいま、できること」—p4／人工カバー実験—p5／IUCNがイトウをレッドリストに登録—p6／新版レスキュー・カード完成—p7／2006年度通常総会のご案内—p8



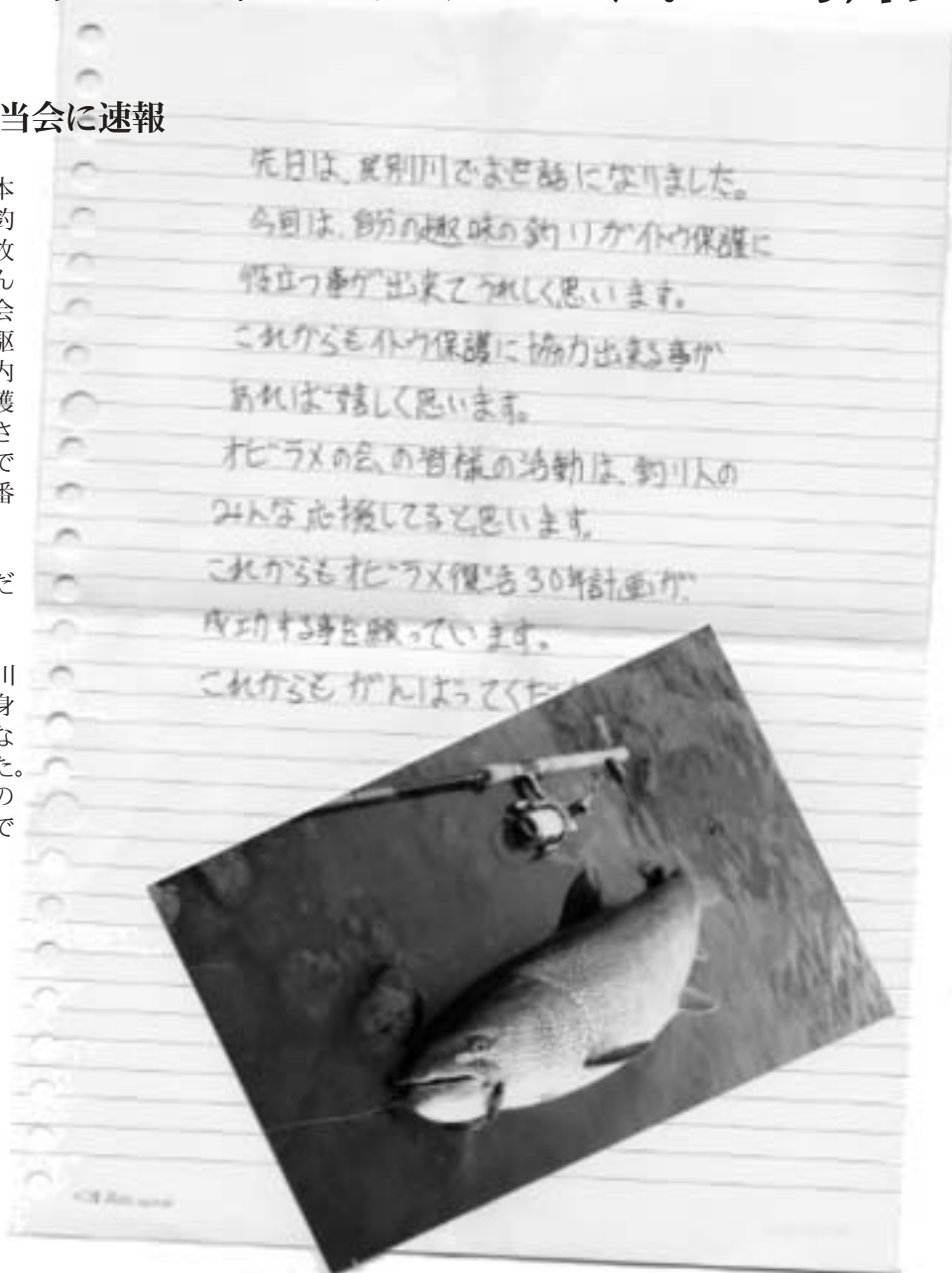
超大物イトウをオビラメの会に寄贈

苫小牧在住の佐々木さん
尻別川本流で釣り上げ、当会に速報

3月5日、倶知安町内の尻別川本流で1メートル近い大物イトウが釣り上げられました。釣り人は苫小牧市在住の佐々木賢さん。佐々木さんは取り込んだ直後、携帯電話で当会事務局に連絡を入れ、急遽現場に駆けつけた会員らとともにニセコ町内の飼育池にこの魚を搬送、無事保護することに成功しました。佐々木さんは非会員ですが、「雑誌の記事でオビラメの会のことを読み、電話番号を控えておいたのが役立ちました」。当会の活動趣旨に賛同して、このイトウを快く当会に寄贈いただきました。

体色などから雌イトウとみられ、4月30日、北海道立水産孵化場の川村洋司主任研究員の指導で改めて身体測定が行なわれましたが、残念ながら今回は採卵はなりませんでした。

このイトウは現在は倶知安町内の親魚畜養池に移され、元気に泳いでいます。



2006年4月30日の測定結果
尾叉長93cm 全長96cm 体重9.5kg

特集 イトウ復活大会議

当会にとって4年ぶりとなるイトウ保護のためのフォーラム「イトウ復活大会議」が2006年3月4日、カヌーイストの野田知佑さんを基調講演者に迎えて開かれました。会場のニセコ町民センターには、来賓の佐藤隆一ニセコ町長をはじめ、熱心なイトウファンたちが集合。絶滅危機種を救うために何が出来るのか、活発な議論が交わされました。このフォーラムは地球環境基金の助成を受けて開催されました。（まとめ・平田剛士、写真・鈴木芳房）

野田知佑さんの基調講演から

□ 日本の国交省というのは、川の深いところは埋めたがり、曲がったところは直線化したがる、そういう役所です。たとえば熊本県の川辺川、非常に美しい川です。きれいなだけでなく、夏は水温が25度くらいあって、一日中浸かっている疲れません。岩の下にアマゴとかアユとかたくさんいて、いくらでも手づかみできます。子どもたちなんか、いったんこの川に入ると一歩も出てこなくなる。魚が捕れて楽しいからです。冬はコイを抱き取りで捕ることもできる。こんな川辺川に国交省はダムを建設していて、反対運動で凍結されていますが、もう8割方完成してしまっています。

徳島県の吉野川の第10堰も、これもいまは反対運動によって凍結状態ですが、何かあれば国交省はすぐ復活させるでしょう。

長良川の河口堰が建設されたときは、北海道から鹿児島まで、この工事はオカシイと考えた人が全国からやってきてカヌーでデモをやりました。河口堰問題は、それまで新聞の県内版にしか載らなかったのが、このデモのおかげで全国区になりました。全国から反対の声が上がると、役所も気にします。さんざん交渉をやって、しかし国交省は河口堰を完成させてしまいました。われわれが予想したとおり、シジミは全滅した。でも役所は認めようとしません。国が悪いことをやっているわけで、非常に残念です。

日本では、自然を守ることが反国家、反権力運動になってしまう。ぼくらはただきれいな川を子孫に残したいだけなのに、それが反国家的になってしまうというのは、これはやっぱり国のほうが悪いと思うんです。地方に行くと、国家に反対することにはまだ抵抗があるというところもありますが、悪いことは悪いんだと、自信を持って反対すべきだと思います。それが民主主義であって、もっと声が反映されなければ。

ほかの先進国なら、50人の反対があればもうやれませ

ん。たとえばニュージーランド、きれいな渓谷が残っています。あそこは原子力発電を拒否していて、水力発電が中心ですが、それでもいい川はちゃんと残している

尻別川でも、せっかく今回こうしてたくさん集まったんだから、きっといい案が出ますよ。吉野川の河口堰計画凍結は、全国で初めて住民側が国交省に勝ったんですが、最初たった4人で始めた運動です。ゆうべ、オビラメの会みなさんと遅くまで議論して、その熱っぽさに、じつに感動したんです。きっと何かができますよ。



**悪いことは
悪いんだと、
自信を持って反対すべき。
それが民主主義です。（野田知佑）**



祝辞

ニセコ町を代表して、「イトウ復活大会議」が開催されることに對し、心からお祝いを申し上げます。

言うまでもなく、尻別川の生態系の頂点に君臨するオビラメ、すなわちイトウを再生するには、この流域の環境すべてを再生しなければなりません。しかし、「オビラメの会」の皆様は、この壮大な目標に臆することなく、長年たゆまぬご尽力を続けられてこられました。また、同会では、それらの取り組みに地域の子どもたちも参加させてくださり、未来の環境を託す人づくりといった点でも、多大なる貢献をしてくださっています。

ニセコ町としましても、公共下水道などの整備に加え、家畜ふん尿を資源化する堆肥センターの整備など、循環型社会の整備を進めてきました。また、現在尻別川流域7か町村と一緒に、尻別川の環境を守る統一条例の整備に取り組むなど、今後も環境保全の取り組みを推進していきます。

最後に、スタッフのみなさまのこれまでのご尽力に敬意を表しますとともに、ご参会のみなさま方のご健勝を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

佐藤隆一 ニセコ町長

ごあいさつ

本日は公開フォーラム「イトウ復活大会議」のためにはるばるご来場いただき、たいへんありがとうございます。多忙な公務の合間を縫ってわざわざ駆けつけてくださった佐藤隆一ニセコ町長、基調講演をいただく野田知佑様、ならびにパネリストのみなさまに深く感謝申し上げます。また今フォーラムにご協賛いただいた地球環境基金をはじめ、いつも当会を支えてくださっている多くの会員のみなさま、サポーターのみなさま、行政機関やマスメディア各位にこの場を借りて改めて深くお礼申し上げます。

さて今年2006年は、当会にとっての「オビラメ復活第二楽章」序曲が始まると感じています。当会が一昨年秋と昨年春、初めて倶利伽羅川流域に放流したオビラメ（尻別川産のイトウ）稚魚たちが親魚となって再び遡上してくる2008年までに、オビラメたちの遡上や繁殖を妨げているものを取り除かなければなりません。地元にお住まいのみなさまや行政のみなさまといっそう協力し合いながら、巨大なオビラメが自由気ままに行き交うかつての尻別川の復活を目指して、活動を展開していきたいと考えています。

どうぞみなさまのいっそうのご支援とご協力をお願い申し上げます。

草島清作

尻別川の未来を考えるオビラメの会会長



地球環境基金が引き続き当会の支援決定！



独立行政法人環境再生保全機構の地球環境基金は4月、当会の「絶滅危機種イトウ尻別川個体群の再導入事業」に対して、約100万円の助成を決定しました。

同基金は、「民間団体（NGO）の環境保全活動への資金の助成や、その他の支援を行い、環境保全活動に向けた国民的運動の発展を図ることを目的として平成5年5月に環境事業団に創設されました（平成16年4月1日より独立行政法人環境再生保全機構へ移管）。「地球環境基金」は、国及び民間の拠出をもって構成され、国が出資等を行う他、国民、企業等からも広く資金拠出（寄付）をお願い

しています。基金の運用益は、環境保全活動に取り組むNGOの活動への助成や人材育成等を行う財源になります。また有識者による委員会の指導を得て運営され、その成果は広く国民の皆様公表されます」（同基金ホームページから）。

当会への助成は、昨年度に引き続いて2年連続です。当会ではこのお金を、オビラメ稚魚・親魚の飼育や放流魚追跡調査（モニタリング）などのために活用する計画です。

遡上イトウを迎えるために いま、できること



特集 イトウ復活大会議

パネリスト／野田知佑、草島清作、江戸謙顕、大光明宏武、久田博康（写真右から、敬称略。司会・平田剛士）

行政としても イトウ保護支援を

司会 まずは会場からご意見をお聞かせください。

フロア 北海道後志支庁水産課の斉藤幸雄です。私たちは昨年度から支庁独自に「尻別川の魚を守る」呼びかけ事業を進めていて、釣り人にも協力をお願いしながら調査をおこなう過程で、「オビラメの会」さんともつながりができました。イトウを増やそうというオビラメの会さんの目標は、尻別川の在来種を守っていくというわれわれと完全につながりますので、行政としても支援していこうと支庁長からも指示を受けて連携を進めているところです。ちょうどおととい、「羊蹄山麓景観づくり指針」への地元案が発表されましたが、水辺の景観づくりが盛り込まれています。こうした動きも尻別川の魚にとっては追い風だと思います。オビラメの会さんからご提案いただいた俱登山川の落差工の再改修などについても、行政機関同士を仲立ちする役割を私たちが果たしていきたいと思っています。

司会 力強いお言葉でしたね。河川環境を保全したり復元したりするには、支流一本だけでなく、流域全体をみていく必要があると思いますが……。

地域とのつながりの中で 進めることが大切

フロア 北海道工業大学の柳井清二です。流域全体の保全管理を進めようとする場合、地域の自主的な動きをどう支援するかが非常に重要です。行政主導でやった場合、いったん始めても、予算が単年度や3年程度で打ち切られると、金の切れ目が縁の切れ目で、後は空中分解してしまうケースが少なくないようです。ですからオビラメの会のように、オカネはないかもしれませんが手弁当で長く地道に、地域のつながりの中でやっていくことは、非常に大事だと思います。

フロア 江戸さんに質問ですが、尻別のイトウ個体群は絶滅に瀕して個体数もわ

ずかだということで、近親交配の心配はないのでしょうか。

近親交配の心配は？

江戸 近交弱勢といって、有害遺伝子が一気に発現したりするとどーんと減っちゃう危険があります。ただ、種によって程度はかなり異なるらしく、魚類はかなり強いのではないかと、とも言われています。特にイトウは、支流ごとに繁殖を繰り返してきて、そこへごくたまに迷入してくる個体の遺伝子を入れるだけで、長く世代交代してきているわけで、もともと強いのではないかと、とも考えられるのです。尻別川の魚が少ないからといって別の集団を持ち込むことは慎重に考えなければいけないことで、そんなことをすると、生き残りたちをかえって圧迫してしまうことにもなりかねません。オビラメの会の再導入に関しては、いまは雌1個体からの稚魚しか放流していないわけですが、未成熟の個体があと数匹いますので、これらの魚を利用して何とか復元できるのではないかと考えています。

司会 その魚の飼育も並の苦労ではないわけですが、ご紹介いただけますか？

イトウを飼うことの 大変さは

フロア オビラメの会事務局長の吉岡俊彦です。2003年、04年と続けて稚魚がとれ、いま32〜33センチに成長した魚と、12センチのものを飼育しています。成長して親になるまで6〜7年続けていかないとしないんですが、本当にたいへんなことなんです。イタチとかサギのような外敵にやられないようにするのにFRPの水槽を作って覆いをかぶせたり、人工飼料をやるので汚れがすごくて頻繁に掃除しなくてはならないですし、実はうちの会社の社員2人がつきっきりで世話していますが、いつ辞めますって出て行かれるんじゃないかと気が気じゃありません。もちろんイトウは自然に回歸してくるの

が一番で、それを目指していますが、この30年計画は杖をつきながらやり続けなければならない仕事だと思っています。みなさんの応援を是非よろしくお願いします。

司会 オビラメの会は会員のみなさんの会費や、支援くださる企業・財団さんなどに支えられて活動が続けています。きょうこの会場でも入会を受け付けていますので、ぜひどうぞ協力ください。さあ、若い研究者のみなさんも一言お願いします。

「こんなに大きくなったよ」って子どもたちに 伝えたい

久田 尻別川でイトウを復活させるために、僕たちは川の景観保全が大事だと思って、小学生たちが川で遊べる環境を復元するにはどうすればいいのかなとか、そんなことを考えて研究を進めています。僕たちもイトウを復活させるんだという強い気持ちでやっていきますので、どうぞ長い目で見てもらって、みなさんのご協力をいただきたいと思います。

大光明 去年、イトウの稚魚を飼育して放流してくれた小学生たちに、「もうこんなに大きく成長しているんだよ」って見てもらいたかったので、きょう都合で子どもたちが来られなかったのは残念ですが、そういう環境教育を通して、子どものうちから環境問題に関心を持ってもらうことは大事だと思うんです。自分自身、釣りから始めてイトウの研究をやりたいと思ったんですが、子どもの頃から自然が好きという人をたくさん育成できたら、これからの日本の自然保護ももっと発展するんじゃないでしょうか。

（次ページへ続く）

川ガキを育てよう。 きっとおもしろい。

司会 野田さん、若い彼らにぜひエールを。

野田 イトウを育てる前に、「川ガキ」を育てるというのはどうですか。吉野川で毎年30人ずつ、同じメンバーで一年通して「川の学校」というのをやっています。目的は子どもを川にたたき込むこと（笑）。川に入ったことのない子どもで

も、魚を1匹捕まえると人生変わっちゃう。成績は落ちますが（笑）。川を見る目つきが変わる。尻別川でも、夏にそんな企画をやるのはおもしろいと思いますね。経費に関しては、吉野川では「吉野川基金」というのをやっています。クレジットカードを作っちゃうんです。毎月のケータイ料金をそれで払ってもらうようにするとかして、利用料の0.5%が基金に入ってくる仕組みです。これで、年に100万円単位で入ってきます。一つのアイディアですが、やる価値はありま

すよ。
司会 どうもありがとうございました。



足立聡氏&鈴木芳房氏 イトウ写真展

フォーラム会場内のロビーでは、オビラメの会会員で写真家の足立聡さん、鈴木芳房さんによる合同イトウ写真展が開催され、来場者たちは水中での迫力あるイトウの姿や、オビラメの会の活動を撮影した作品に見入っていました。

イトウ再導入河川における人工カバー（すみか）実験

上畑勇騎（北海道工業大学環境デザイン学科）

わたしたちは2005年6月から、倶利伽羅川流域のイトウ稚魚放流河川でカバー（すみか）設置実験を続けています。カバーは、放流したイトウ稚魚たちにすみかを提供するもので、稚魚期・幼魚期のイトウたちが少しでも安全に過ごせるようにと始めました。

この川には「自然区間」と「改修区間」がありますが、後者は護岸のためにコンクリートブロックが埋め込まれていて、流路が直線的で、そこで人工的なカバーを設置し、流れに変化を与え、また増水や捕食者からの避難場所を創り出すことで、イトウ稚魚はもとより、他の小型水生生物にとっての生息環境を創出することを目的としています。

『OBIRAME newsletter』22号で紹介された笹や土嚢による人工設置物がイトウ稚魚の生息環境創出に効果があることが、その後のモニタリング調査によって確認できたので、発展型として、10月18

日にパレット（架台）によるカバーを10基設置しました。この日は東京からTVクルーが撮影取材に来ていましたが、なるべく意識しないように張り切ってがんばりました。

材料は、フォークリフトが荷を持ち上げ

るときに台として使用する木製パレットを利用しています。3枚のパレットを組み合わせるとカバー1基とします。「改修区間」内に200mの調査区間を設定していますので、10基のカバーを20mおきに設置することとし、右岸、左岸、右岸……と交互に置いていきます。固定方法は木杭で河床に4箇所を留め、コンクリート部に小さな穴を開けヒートンとワイヤで2箇所留めます。さらに土嚢を周りに置いて固定します。その後、パレット内に木の枝を入れて完成です。組み立て作業から現場の川辺で行ない、朝10時半から始めて、土嚢運搬や組み立て、設置、片づけまで終わったのは午後4時でした。お手伝いいただいた皆さん、お疲れさまでした。

効果はこれからのモニタリングにより明らかになっていくと思いますが、まずはイトウ稚魚の越冬環境として機能するはずです。また、設置物が大きいことから、流れに蛇行性を与え、従来の単調な流れに変化を与えたいと思います。

今回のパレットカバーは、壊れないように頑丈に作り込みすぎ、肝心のモニタリングが困難になってしまいました。春までには改良する予定です。パレットカバーはイトウの稚魚を目的に作ったのでパレットの隙間が狭く、2～3年後に回帰してくるイトウ（熱望しています！）はこのカバー内に入ることはできないでしょう。その「青年イトウ」たちのために機能するような対策も進めていかなくてはなりません。モニタリングも含め、課題を順々にクリアーしていきたいと思います。

（2006年3月寄稿。筆者の上畑勇騎さんは北海道工業大学環境デザイン学科で本研究を論文にまとめられ、卒業されました。この研究は同学科の早坂洋介さん、久田博康さんらによって継続されています。）



フォーラム「イトウ復活大会議」に事情により参加できなかった上畑さんに代わって、上畑さんの研究について発表する早坂洋介さん（右）と久田博康さん。

ボクラ
バンダや白クマより
絶滅に近いんだって

photo/Yoshifusa Suzuki

トピックス

国際自然保護連合が イトウをレッドリストに登録

「レッドデータブック」（絶滅に瀕している種のリスト）の編纂で知られる国際自然保護連合（IUCN、本部スイス）は5月、2年ぶりにレッドリストを改訂し、初めてイトウを登録しました。

今回の改訂では、172種が絶滅に近づき、逆に139種が絶滅の危機から遠ざかったと判定されました。イトウ（学名hucho perryi）は今回初めて評価対象となり、ランクは「CR」。「絶滅の危険がきわめて高い」という最上位ランクです。

IUCNサケ科魚類専門家グループのランド博士が執

筆したリスト付属の評価書によれば、北海道内のイトウについては、当会の江戸謙顕さん（文化庁技官）や川村洋司さん（北海道立水産孵化場主任研究員）らの研究成果に基づき、今後42年間（イトウの平均寿命を14歳と仮定したときの3世代に当たる）のうちに道内のイトウ個体群が絶滅する確率を57%と算出しています。

IUCNには日本の環境省をはじめ、各国の環境行政当局と世界中の自然保護団体が加盟しています。今回のレッドリスト最悪ランクへの登録は、イトウ保護に向けて国内行政機関に重い腰を上げさせるきっかけになるか

絶滅	EX	すでに絶滅したと考えられる種	ドードー
野生絶滅	EW	飼育・栽培下であるいは過去の分布域外に、個体(個体群)が帰化して生息している状態のみ生存している種	
絶滅危惧Ⅰ類	CR+EN	絶滅の危機に瀕している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生で存続が困難なもの	
絶滅危惧ⅠA類	CR	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの	イトウ
絶滅危惧ⅠB類	EN	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの	ジャイアントバンダ
絶滅危惧Ⅱ類	VU	絶滅の危険が増大している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続いて作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの	ホッキョクグマ
準絶滅危惧	nt	存続基盤が脆弱な種。現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの	オニイトマキエイ（マンタ）
情報不足	DD	評価するだけの情報が不足している種	

国際自然保護連合レッドリストのランキング解説（国際自然保護連合日本委員会のホームページなどから）

イトウのための落差工 改善工事を本格検討 北海道 後志支庁

オビラメ再導入実験河川（尻別川支流俱登山川水系）の3基の落差工（右の写真）を切り下げよう要望書と独自の試案を提出した当会に対し、北海道後志支庁は5月までに、周辺の農業整備関連事業の一環として、これら落差工をイトウが遡上可能なように改修する方針を決定しました。順調に運べば、2007年度にも着工し、04年秋と05年春に放流した人工孵化イトウたちが回帰してくると予想される2008年春の遡上時期までに改修が間に合う可能性も出てきました。

この改修事業計画を担当する同支庁産業振興部農村振興課を招いて、当会は6月24日（土）午後2時30分からオビラメ勉強会「オビラメ復元に向けての俱登山川落差工改修について」を開きます（詳しくは8ページをご参照ください）。昨年暮れに発表した当会の試案では「住民参加型の事業」を要望しています。今後も行政サイドと議論を重ねつつ、ベストな改善工事を実現し、放流イトウの自然回帰に備える考えです。



来年度着工に向け、合同オビラメ勉強会（6月24日）を開催

採卵はならず…… しかし成長はきわめて良好！ 飼育中のイトウ親魚たち

豪雪だった尻別川周辺からようやく雪の消えた5月13日、倶知安町内のイトウ親魚畜養池で恒例の採卵作業が行なわれました。会員ら15人が参加。池の水位を徐々に落としてから、大型の玉網でイトウを一匹ずつすくい上げ、麻酔で眠らせながら慎重に身体測定と成熟の判定をしました。残念ながら雌イトウたちからの採卵は今年はありませんでしたが、1メートルに近い魚たちも含め、昨年にくらべてますます成長していることがわかり、来期以降に期待がふくらみました。

		2005年5月5日	2006年5月13日
ノリカ	尾叉長	82.0cm	88.0cm
	全長	87.0cm	90.0cm
	体重	—	8.4kg
チョースケ	尾叉長	86.0cm	87.0cm
	全長	—	89.0cm
	体重	—	10.7kg
キンチャン	尾叉長	63.0cm	64.5cm
	全長	66.0cm	67.0cm
	体重	—	2.7kg
チビ	尾叉長	88.0cm	88.0cm
	全長	91.0cm	90.0cm
	体重	—	8.0kg



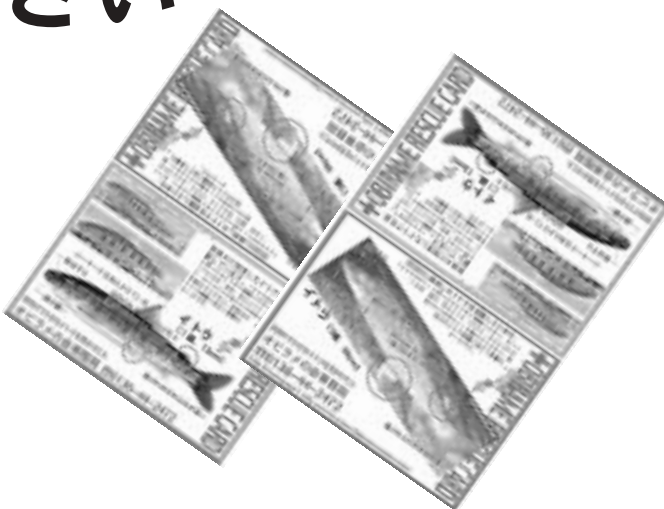
待望の新バージョン完成！

オビラメ・レスキュー・カード をご活用ください

放流イトウを追跡するための「オビラメ・レスキュー・カード」。待望の3年魚バージョンが完成しました。これで安心してイトウの稚魚を見分けられます。オビラメの会のホームページからダウンロードできます。ぜひご活用ください。

レスキュー・カードの楽しみ方

- (1) pdfファイルをダウンロードします
- (2) A5判用紙にプリントアウト。
- (3) 絵を外側にして、真ん中から二つ折りにします。
- (4) 捕まえた稚魚を実物大で比較できるオビラメ・レスキュー・シートの出来上がり。



尻別川の未来を考えるオビラメの会

2006年度通常総会のご案内

【日時】 2006年6月24日（土曜）午後1時半～
【会場】 ニセコ町民センター（ニセコ町富士見）
会場で新年度会費（2000円）を申し受けます。どうぞ用意ください。

引きつづき オビラメ勉強会

「オビラメ復元に向けての倶登山川落差工改修について」
（協力／後志支庁水産課、同農村振興課）

【日時】 2006年6月24日（土曜）午後2時半～
【入場料】 無料（どなたでもご参加いただけます）

お問い合わせはオビラメの会事務局電話0136-44-2472
<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えてお振り込み下さい（手数料はご負担願います）。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末（5月）までです。概ね1月以内に会員証とニュースレターをお届けします。

■年会費2,000円
■郵便振替
02720-9-11016
■加入者名
「オビラメの会」



3月4日、「イトウ復活大会議」会場で野田知佑さんを囲んで。

撮影・鈴木芳房氏

尻別川の未来を考えるオビラメの会は、会員のみならず、よりの会費と、寄付金および地球環境基金、パタゴニア日本支社の助成金を受けて活動しています。



patagonia
committed to the planet

オビラメの会ニュースレター 第25号（2006年6月発行）
OBIRAME Newsletter No.25, June 2006
■発行■ 尻別川の未来を考える オビラメの会
■編集■ 平田剛士
■印刷■ （株）須田製版（北海道滝川市栄町4-4-1）
■発送■ 吉岡俊彦
■郵便振替■ 02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」
■オビラメの会事務局■
北海道虻田郡ニセコ町富士見65「ライズ」内
吉岡俊彦方 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472
copyright 2001-2006 Obirame Restoration Group
<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう

御食事処・酒房

ライズ

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 44-2472
Email / itou110@estate.ocn.ne.jp